

# 女性歌人たちの地名表現

## —平城京を中心に—

野口 恵子

### 一 序

『万葉集』の男性歌人の多くは、天皇の行幸に随行したり、地方官として任地に赴いたりしている。一方女性歌人は、そうした男性に比べ、行動範囲が限られていた。したがって、女性歌人と男性歌人の地名表現には、かなりの違いがあることが予想される。

和銅三年（710）、平城京への遷都が行われた。盆地の南部から北部に遷ったことで、今まで慣れ親しんでいた環境が一変したのだが、それによって、彼女たちの世界観も大きく変化したに違いない。

そこで、平城京への遷都は歌の表現にどのような変化をもたらしたのか。本稿は、遷都後の女性歌における地名表現から、その点を考えていきたい。また、女性歌人たちの地名表現は、歌の表現の一つとして、どのような役割を担っていたのか。その点をも考えていきたいと思う。

ちなみに、ここでいう「地名表現」とは、多くの地名辞書などにあるような、行政的・地勢的・歴史的な地名ばかりではなく、通常は地名とされない、場所を指し示す表現も含んでいる<sup>(1)</sup>。彼女たちが世界をどう捉えていたかということを考えることが、本稿の目的だからである。

### 二 藤原京の時代における地名表現

まず、藤原京の時代に詠まれたと思われる女性歌の中で、地名表現が見られるものを、次に挙げてみる。比定地については諸説あるものもあるが、問題のある場合はその都度論ずることとして、とりあえず『万葉集〈新編日本古典文学全集〉』の「地名一覧」<sup>(2)</sup>に従っておく。

#### 【女性歌における地名表現（藤原京の時代）】

「泣沢の神社」（奈良県橿原市）	②二〇二	檜隈女王
「秋の田」	②一一四	但馬皇女
「道の隈廻」	②一一五	但馬皇女
「的形」（三重県松阪市）	①六一	舍人娘子
「岸」（大阪府大阪市住吉区）	①六九	清江娘子
「白菅の真野の榛原」（兵庫県神戸市）	③二八一	高市連黒人妻
「真野の榛原」（兵庫県神戸市）	③二八一	高市連黒人妻
「住坂の家」（奈良県宇陀市）	④五〇四	柿本朝臣人麿妻
「石川」（島根県邑智郡）	②二二五	柿本朝臣人麿妻

以上、6人の女性歌人の作品中に、9例見られる。意外に少ないが、多くは場所の特定ができる地名表現である。都の外の地名の方が多く、藤原京の内のは、次の檜隈女王の歌1例に過ぎない。

泣沢の 神社に神酒据え 祈れども 我が大君は 高日知らしぬ (②二〇二)

「泣沢の神社」とは、現在の橿原市木之本町の畝尾都多本神社のことである。かつては香具山と埴安池をへだてた対岸にあった<sup>(3)</sup>という。ちょうど藤原京の東方に位置する。檜隈女王は、高市皇子の娘<sup>(4)</sup>

とされる。<sup>(5)</sup>父のために、都内の、香具山近くに鎮座する神に祈ったということになる。高市皇子の宮は「香具山の宮」(②一九九)とも称されている。邸宅近くの神社でもあり、檜隈女王にとって最も身近な神社の一つであったことがわかる。

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、穂積皇子を思ひて作らず歌一首

秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに 君に寄りなな 言痛くありとも (②一一四)

但馬皇女は、天武天皇の娘である。和銅元年(708)に「六月丙戌、三品但馬内親王薨しぬ」(『続日本紀』)とあり、藤原京の時代に亡くなったことがわかる。一方高市皇子は持統十年(696)に薨去しているので、この歌はそれ以前の作ということになる。したがって、「秋の田」は旧都である飛鳥浄御原宮の周辺の田であろう。また穂積皇子については、天武二年(673)に「大薨娘が皇子を生む」(『日本書紀』)という記事が見られる。この「皇子」が穂積皇子だとすれば、穂積は飛鳥浄御原宮の時代の生まれだと考えられる。但馬皇女は、その穂積が生まれた旧都周辺の「秋の田」の風景を思い浮かべたのだらう。

大宝二年(702)の三河国行幸時に詠まれた歌にも、地名表現が見られる。

舍人娘子が従駕して作る歌

ますらをの さつ矢手挟み 立ち向かひ 射る形的は 見るにさやけし (①六一)

「ますらをの……射る」という序詞は、従駕の兵たちの勇壮な姿を反映したものであろうが、そこから導き出されたのが「形的」である。「形的」は「三重県松坂市東部」<sup>(6)</sup>とするのが一般的である。行幸先の地名を取り入れて、その地を賛美したのであろう。女性歌人としては珍しい1首である。<sup>(7)</sup>

以上、藤原京の時代に詠まれたと思われる女性歌の地名表現をいくつか見てきた。檜隈女王と但馬皇女は、天武系統の皇女である。天武皇統が中心となって形成された国家の時代であるが、彼女たちはそうした世界の一部である藤原京をどのような眼差しで見ているのだろうか。

この時代の女性歌の数が少ないことも考慮に入れるべきだが、彼女たちの記憶の中には、飛鳥浄御原宮の時代の風景が残っていたのではないか。但馬皇女のように、藤原京という新しい都で生活してはいても、意識の根底には生まれ育った旧都飛鳥の景観があったと考えるのである。舍人娘子は伝未詳であるが、舍人皇子の歌(②一一七)に和した歌(②一一八)があることから、二人は乳兄弟である可能性が考えられている<sup>(8)</sup>。たとえ、そうではなくても、舍人皇子と同年代である可能性が高く、舍人娘子も飛鳥生まれと考えられる。藤原京をほとんど詠まないのは、彼女たちにとってはそこが懐かしい地ではなかったからであらう。飛鳥の地と藤原京は、眼と鼻の先程度しか離れていない。そうした距離感も、いつまでも飛鳥が親しい地であった原因であると考えられる。

一方、京外の地名を詠んでいるのは、それらの地に対して愛着があつてのことではないだらう。行幸先の地名が典型だが、その多くは異境の景観として詠まれたものであったと考えられる。

### 三 平城京の時代における地名表現(1)

では、平城京の時代における女性歌の地名表現について考えていきたい。『万葉集』に歌が載せられている女性歌人は総勢119人であった。<sup>(9)</sup>うち、平城京の時代における女性歌人は57人。<sup>(10)</sup>ただし、阿倍女郎・石川賀係女郎・海上女王・大伴家持之妹・大伴部真足女・大神女郎・娘子(藤原広嗣と贈答した娘)・娘子(遣新羅使が松浦で停泊した時の宴会に参加した遊行女婦)・久米女王・椋椅部弟女・椋椅部刀自売・巨勢郎女・佐伯宿禰東人妻・丹波大女娘子・広河女王、以上15人の歌には、地名表現が一つも含まれていない。とは言え、過半数の女性歌人が、地名表現を取り入れていることは、留意すべき点であらう。

地名表現の総数は204例。最も多く地名表現の見られる女性歌人は、やはり大伴坂上郎女<sup>(11)</sup>である。60例もの地名表現が見られるのだ<sup>(12)</sup>。一方、坂上郎女以外の女性歌人の作品から地名表現を拾ってみると、56人で144例だから、坂上郎女がとりわけ積極的にそれを用いていたということがわかる。

また「佐保河」のように場所が特定できる地名は、坂上郎女歌も含めて66例であった。それらを以下のように、地域ごとに整理してみた。

【女性歌における地名表現（平城京の時代）】

《平城京内》24例

「佐保河」（奈良市春日山から発する川）	③四六〇	大伴坂上郎女
「佐保河」	④五二五	大伴坂上郎女
「佐保河の岸」	④五二九	大伴坂上郎女
「佐保の河瀬」	④五二六	大伴坂上郎女
「佐保の川原」	⑧一四三三	大伴坂上郎女
「佐保の河門の瀬」	④五二八	大伴坂上郎女
「佐保（風）」（奈良市北部の佐保川北岸）	⑥九七九	大伴坂上郎女
「佐保の山辺」（平城京外京の北に起伏している山）	③四六〇	大伴坂上郎女
「佐保路」（奈良市）	⑳四四七七	円方女王
「佐保道」（奈良市）	⑧一四三二	大伴坂上郎女
「春日野」（奈良市街東方の山野）	③四六〇	大伴坂上郎女
「春日野」	④五一八	石川郎女（大伴宿禰安麿の妻）
「春日の野辺」	③四〇四	娘子（佐伯赤麿と贈答）
「春日山」（奈良市東方の春日・御笠・若草などの山地一帯）	④六七七	中臣女郎
「春日山」	④五八四	大伴坂上大嬢
「春日山」	④七三五	大伴坂上大嬢
「高円山」（春日山と地獄谷を隔てて続く山）	⑥九八一	大伴坂上郎女
「高円山」	⑥一〇二八	大伴坂上郎女
「高円の秋の野の上」（奈良市東南）	⑧一六一〇	丹生女王
「飛羽山」（奈良市東大寺の東北）	④五八八	笠女郎
「平山の小松が下」（奈良市一条大路の北方背後に連なる山）	④五九三	笠女郎
「菅原の里」（奈良市菅原町）	⑳四四九一	石川郎女（藤原朝臣宿奈麿の妻）
「佐紀沢」（平城京北郊）	④六七五	中臣女郎
「平城の明日香」（奈良市内）	⑥九九二	大伴坂上郎女

《大和国》12例

「古郷」（高市郡明日香村）	④七二三	大伴坂上郎女
「故郷の飛鳥」（高市郡明日香村）	⑥九九二	大伴坂上郎女
「故郷の奈良思の岡」（所在未詳）	⑧一五〇六	大伴田村大嬢
「明日香の川」（高市郡明日香村）	④六二六	八代女王
「明日香の里」（高市郡明日香村）	①七八	太上天皇
「泣沢の神社」（橿原市木之本町）	②二〇二	檜隈女王
「竹田の原」（橿原市東竹田町）	④七六〇	大伴坂上郎女

「始見の崎」(桜井市外山の辺り?)	⑧一五六〇	大伴坂上郎女
「猪養の山」(桜井市吉隠)	⑧一五六一	大伴坂上郎女
「泊瀬の山」(桜井市初瀬)	⑧一五九三	大伴坂上郎女
「痛背の河」(桜井市東北部?)	④六四三	紀少鹿女郎
「立田山」(生駒郡三郷町立野)	⑰三九三一	平群氏女郎
《畿内》5例		
「可祢波の田居」(相楽郡山城町)	⑳四四五六	薩妙観
「難波」(大阪市)	④六一九	大伴坂上郎女
「住吉」(大阪市)	⑥一〇二〇	石川朝臣乙麿の妻
「有間山」(神戸市北区有馬町)	③四六〇	大伴坂上郎女
「須磨(人)」(神戸市兵庫区・長田区)	⑰三九三二	平群氏女郎
《夷》26例		
〈東海道〉		
「伊勢の海」(三重県中央部から東北部)	④六〇〇	笠女郎
「足柄の八重山」(神奈川県・静岡県)	⑳四四四〇	郡司妻
〈東山道〉		
「詫馬野」(滋賀県坂田郡?)	③三九五	笠女郎
「陸奥の真野」(福島県相馬郡鹿島町)	③三九六	笠女郎
「味真野」(福井県武生市)	⑮三七七〇	狭野茅上娘子
「多摩の横山」(東京都府中市・多摩市)	⑳四四一七	宇遲部黒女
〈北陸道〉		
「若狭道の後瀬の山」(福井県西南部)	④七三七	大伴坂上大嬢
「安積香山」(福島県郡山市)	⑰三八〇七	前の采女
〈山陽道〉		
「吉備」(備前・備中・備後)	④五五四	丹生女王
〈西海道〉		
「大城山」(福岡県大野城市)	⑧一四七四	大伴坂上郎女
「名児山」(福岡県福津市)	⑥九六三	大伴坂上郎女
「大浦田沼」(福岡県福岡市)	⑰三八六三	荒雄妻子
「志賀」(福岡県福岡市)	③二七八	石川朝臣吉美侯(石川少郎)
「志賀」(福岡県福岡市)	⑪二七四二	石川朝臣吉美侯(石川少郎)
「志賀」(福岡県福岡市)	⑰三八六三	荒雄妻子
「志賀」(福岡県福岡市)	⑰三八六九	荒雄妻子
「志賀の山」(福岡県福岡市)	⑰三八六二	荒雄妻子
「也良の崎」(福岡県福岡市)	⑰三八六六	荒雄妻子
「也良の崎」(福岡県福岡市)	⑰三八六七	荒雄妻子
「玉島」(佐賀県東松浦郡)	⑤八五四	娘等
「松浦川の川波」(佐賀県東松浦郡)	⑤八五八	娘等
「松浦川七瀬の淀」(佐賀県東松浦郡)	⑤八六〇	娘等
「名欲山」(大分県竹田市?)	⑨一七七八	娘子(藤井蓮と贈答)

「御船の泊り」(熊本県八代市)	③二四七	石川朝臣吉美侯(石川少郎)
「筑紫(船)」(九州地方または筑前・筑後)	④五五六	賀茂女王
「筑紫」(九州地方または筑前・筑後)	⑳四四二二	服部些女

注目したいのは、当然のことだが、平城京内の地名が多くを占めているという点である。藤原京の時代の場合、京内の地名は「泣沢の神社」しかなく、京外のもので大半を占めていたことと好対照である。また、

故郷の 飛鳥はあれど あをによし 奈良の明日香を 見らくし良しも (⑥九九二)  
 という歌の「故郷の飛鳥」のように、飛鳥浄御原宮の置かれた飛鳥を詠んでいる点も目立つ。旧都と新都を対照して歌っているのだ。これも藤原京の時代にはなかったことである。天平期には、飛鳥で育った世代も存在したが、坂上郎女は藤原京で生まれ育った世代である。郎女にこうした表現が生まれたのは、旧世代の記憶が伝えられていたからであろう。

ともあれ、この時代の地名表現を俯瞰すると、平城京から「夷」へと広がっていることが見て取れる。しかし、広がりのある一方で、偏りがあるのも事実である。例えば、平城京内の地名は、平城宮の東側に位置するものばかりである。大和盆地の地名も、一カ所を除いて大和盆地の東側に集中している。ところが、畿内の地名はすべて西側である。そして「夷」の地名は、九州にまで及んでいるが、その多くは西側である。今回の共同研究において梶川信行は、東アジアにおける日本列島の位置と、その形がもたらした必然的な結果として、平城京の時代においてもなお、東西を優位軸とする宇宙観は依然と存在し続け、南北を軸とする宇宙観と共存していたのだと指摘しているが、女性歌人の地名表現の分布から見ても、この指摘は確かであると言える。西側に広がっていた国家の視野が、女性歌人たちの中にも浸透していたのであろう。

次に、具体的な場所を指し示してはいないが、題詞や本文、左注などの情報から、場所が特定できる地名表現について考えておきたい。先ほどと同様に、それを地域別に分類してみた。

#### 【女性歌における地名表現(平城京の時代)】

《平城京内》22例

「室」(殿舎)	⑧一六三七	元正天皇
「屋戸」(皇后宮)	⑱四二二四	光明皇后
「屋戸」(大伴宿禰田主の家)	②一二六	石川女郎
「里家」(平城京内にある里家)	③四六〇	大伴坂上郎女
「屋戸」(田村家)	④七五九	大伴田村大嬢
「屋戸」(久米女郎宅)	⑧一四五九	久米女郎
「わが屋戸」(田村宅)	⑧一六二二	大伴田村大嬢
「わが屋戸」(笠女郎宅)	④五九四	笠女郎
「わが屋」(田村宅)	⑧一六二三	大伴田村大嬢
「君が家」(家持の家)	⑧一五〇五	大神女郎
「吾家」(坂上郎女宅)	⑧一四四五	大伴坂上郎女
「家」(湯原王宅)	④六三四	娘子(湯原王と贈答)
「家」(理願宅)	③四六一	大伴坂上郎女
「家」(坂上家)	④六五一	大伴坂上郎女

「家」(西の宅)	⑥九七九	大伴坂上郎女
「吾が床の辺」(坂上家)	⑰三九二七	大伴坂上郎女
「宅」(理願宅)	③四六〇	大伴坂上郎女
「里」(田村の里・坂上の里)	④七五七	大伴田村大嬢
「里」(平城京城一帯)	⑰三九三九	平群氏女郎
「里」(大宮人の私邸)	⑥一〇二六	豊島采女
「その山」〈比喻〉	③四〇一	大伴坂上郎女
「屋前」〈比喻〉	③四一〇	大伴坂上郎女
《大和国》1例		
「田廬」(竹田庄)	⑧一五九二	大伴坂上郎女
《畿内》5例		
「手向けの山」(相坂山)	⑥一〇一七	大伴坂上郎女
「庭」(難波の諸兄邸)	⑱四〇五九	河内女王
「殿」(難波の諸兄邸)	⑱四〇五九	河内女王
「この里」(山城の諸兄邸)	⑱四二六八	孝謙天皇
「夏の野」(京都府綴喜郡)	⑱四二六八	孝謙天皇
《夷》3例		
「川上」(松浦川の川上)	⑤八五四	娘子〈旅人作か?〉
「家」(娘子宅)	⑤八五四	娘子〈旅人作か?〉
「吾家の里」(娘子宅がある里)	⑤八五九	娘子〈旅人作か?〉

この場合も、全体を俯瞰すれば、平城京から「夷」へと拡がっていることが見て取れる。特に、平城京内の地名表現が圧倒的に多い。多くの女性歌人が、歌を贈る相手と自分の家や里を詠んでいるのである。

また、ここでも広がりがある一方で、偏りがある。特に平城京内の地名表現は平城宮の東側、とりわけ佐保周辺に集中している。周知のように、佐保は高級貴族の邸宅が集中していた地域だが、女性歌人たちの視野も、佐保を中心としていたと言える。

#### 四 平城京の時代における地名表現(2)

では、この時代の代表的な女性歌人の地名表現を検証し、藤原京の時代のものと比較してみる。ただし、紙幅の都合上、全ての歌人を取り上げることができない。また、ある程度の歌数がないとその傾向を捉えることはできないので、階層別に代表的な女性を取り上げることとする。

##### a 女帝・皇后の地名表現

まず、元正天皇・孝謙天皇・光明皇后の地名表現を取り上げてみる。3人の歌は、『万葉集』中にそれぞれ8首・3首・3首と、少数の歌しか載っていないが、宇宙の中心とも見なされる平城宮で生活をしてきた点で、共通性を持つと考えることができる。そうした彼女たちの地名表現は、どのようなものだったのか。それを一括して考えてみようと思う。

元正天皇は、草壁皇子の子で、天武九年(680)生まれである。飛鳥生まれの天皇である。彼女の歌は、すべて公的な場で詠まれたものである。ただし、「酒を節度使の卿等に賜へる歌」(⑥九七三)

は、聖武天皇の作である可能性が考えられるので、取り上げないことにした。

長屋王の「佐保の宅」で行われた「肆宴」での歌、

はだすすき 尾花逆葺き 黒木もち 造れる室は 万代までに (8)一六三七  
に見える「室」は、もともとは「窓のない家。窟や堅穴式住居」<sup>(16)</sup>をさすが、ここでは天皇や太上天皇の来臨のために特別に造られた殿舎のことであろう。とはいえ、「室」意外にも、「はだすすき」「尾花」「黒木」と、野趣あふれる景物ばかりを詠んでいる。一見、天皇が足を運ぶ場所としてはふさわしくないものばかりだが、鄙を装うことこそ風流だと考えられていたのだろう。あるいは、そうやって落差を演出することが世界の中心たる平城宮の主を称えることになったと考えていいのかも知れない。長屋王がわざわざ用意した「室」を「万代までに」と祝福した、室寿ぎの歌である。

また、天平十六年(744)に難波宮に行幸された時の歌、

玉敷かず 君が悔いて言ふ 堀江には 玉敷き満てて 継ぎて通はむ (18)四〇五七  
には「堀江」が詠まれている。これは前歌で橘諸兄が「堀江には 玉敷かましを」(18)四〇五六と詠んでいるのを受けている。「貴人の来訪を光栄に思い、その準備の不十分であったことを詫げる常用句」<sup>(17)</sup>とされる。結句で「玉敷き満てて 継ぎて通はむ」とうたい、諸兄の謝罪に対してやさしく慰めている。これも儀礼的な表現といえよう。

孝謙天皇の場合も同様である。孝謙天皇は、聖武天皇の第一皇女で、養老二年(718)に生まれている。彼女は平城京で生まれたのである。

従四位上高麗朝臣福信に勅して難波に遣はし、酒肴を入唐使藤原朝臣清河等に賜ふ御歌一首  
并せて短歌

そらみつ 日本の国は 水の上は 地行くごとく 船の上は 床に居るごと 大神の 鎮へる国  
そ (以下省略) (19)四二六四

「日本の国」ばかりでなく、「鎮へる国」も日本のことを指すが、それぞれに「そらみつ」や「大神の」といった、いわゆる枕詞(あるいは枕詞的表現)を用いて賛美している。この常套的表現に満ち満ちた儀礼的な歌が、本当に天皇自身の作であったかどうかは定かでないが、日本を世界の中心の国として賛美しているのだ。この場合の地名表現も儀礼的な用法と言えよう。

それでは、大宝元年(701)に藤原京で生まれた光明皇后の場合はどうか。彼女は、吉野行幸時の歌で、

朝霧の たなびく田居に なく雁を 留め得むかも 我がやどの萩 (19)四二二四  
と、「田居」や「我がやど」といった、自身の視野に直接入ってくるものを詠んでいる。平城宮辺りの「田居」や「雁」、皇后宮である「我がやどの萩」に思いを馳せているのは、聖武天皇と共に行幸しているからであろう。平城宮の景物を、天皇と共有しているからだ。この歌を儀礼歌と呼ぶことはできないが、平城宮の風景を詠むことで、天皇が造られた宮に対する愛着を表現している。女帝二人とは違って、とても身近な地名を詠んでいる。女帝と皇后といった立場の違いによるものであろうが、両者の歌い方の違いは留意すべきであろう。

女帝と皇后の歌は少ない。当然、地名表現も少ないが、それは彼女たちの行動範囲が限定されていたからであろう。また、女帝と皇后の歌を収集することが困難であったこともその原因であろうが、そこから窺えるのは、平城宮を世界の中心と信じていたという点であろう。

#### b 大伴坂上大嬢・大伴田村大嬢の地名表現

次に、大伴坂上大嬢と大伴田村大嬢について考えてみたい。二人とも大伴宿禰宿奈麻呂の娘で、異



母姉妹である。母の坂上郎女は藤原京の生まれなので、大嬢は平城京で生まれたと考えられる。坂上大嬢は、養老二年(718)年生まれの家持<sup>(18)</sup>より年下であった可能性が高い。田村大嬢も、おそらく同世代であろう。つまり、二人は平城京生まれの貴族のお嬢さんたちと言える。彼女たちが詠んだ地名は、「佐保の宅」<sup>(19)</sup>「田村の里」<sup>(20)</sup>「坂上の里」<sup>(21)</sup>といった大伴氏の諸宅と、氏寺や庄などに限られているが、それはその行動範囲が非常に狭いものだったからであろう。

田村大嬢の歌はすべて坂上大嬢に贈ったものだが、9首中の8首に地名表現が見られる。例えば、

大伴田村家の大嬢、妹坂上大嬢に贈る歌四首

外に居て 恋ふれば苦し 我妹子を 継ぎて相見む 事計りせよ (④七五六)

遠くあれば わびてもあるを 里近く ありと聞きつつ 見ぬがすべなき (④七五七)

白雲の たなびく山の 高高に 我が思ふ妹を 見むよしもがも (④七五八)

いかならむ 時にか妹を むぐらふの 汚なきやどに 入れいませむ (④七五九)

右、田村大嬢と坂上大嬢とはともにこれ右大弁大伴宿禰奈良麿卿の女なり。卿、田村の里に居れば、号けて田村大嬢といふ。ただし、妹坂上大嬢は、母、坂上の里に居れば、よりて坂上大嬢といふ。時に、姉妹諮問ふに歌を以て贈答す。

という歌がある。場所を具体的に指し示さない「外」「里」「山」「やど」といった地名表現が目につく。しかし、これらの地名表現がどこを指しているのか、お互いに了解していて、具体的に言わなくても、それだけで十分だったのであろう。それは、異母姉妹である二人の生活環境がほぼ同じだったからだと思われる。このような地名表現のあり方は、歌の作り手と受け手の関係が、ごく親しいからこそ成立するものであると考えられる。

大伴田村大嬢の、妹坂上大嬢に与へし歌一首

故郷の 奈良思の岳の 霍公鳥 言告げ遣りし いかに告げきや (⑧一五〇六)

「故郷の 奈良思の岳」は、飛鳥の地にある山を指している<sup>(22)</sup>。所在地は明確ではないが、平城京生まれの彼女たちにとって「飛鳥」は「故郷」であるわけがない。「飛鳥」は、彼女たちの父母の「故郷」であった。つまりこの地名表現は、田村大嬢の生活環境の中から生まれたものではない。

結句に「いかに告げきや」とあるが、これは坂上大嬢に対して「お元気ですか」と尋ねている。その伝言を「故郷の 奈良思の岳の 霍公鳥」に頼んでいるのだ。それは、この岡の「霍公鳥」でなければならぬ理由があるのだろうが、他に用例もなく、不明としか言いようがない。

大伴坂上大嬢は、『万葉集』に11首の歌が見える。地名表現はそのうちの3首に見える。それらは、すべて大伴家持に贈った歌である。

春日山 朝立つ雲の 居ぬ日なく 見まくの欲しき 君にもあるかも (④五八四)

春日山 霞たなびき 心ぐく 照れる月夜に ひとりかも寝む (④七三五)

かにかくに 人は言ふとも 若狭道の 後瀬の山の のちも逢はむ君 (④七三七)

「春日山」は、平城宮の東方にある山地一帯を指している。大嬢の住む「坂上の里」からも、家持の住む「佐保の宅」からも、それは見ることが可能である。二首とも「春日山」に「雲」や「霞」がかかっている様子を詠んでいるが、実際にそれを見て詠んだかどうかは別として、大嬢にとってそれは、自邸の延長のような風景である。そうした「春日山」の風景は、家持と共有できるものであったと言える。

三首目の「若狭道の 後瀬の山」は福井県小浜市南西の海沿いの山とされている<sup>(23)</sup>が、大嬢はおそらくそこに行ったことがなかったと思われる。家持は越中守として赴任するときに北陸道を下っているが、若狭国は北陸道とは言え、越中へのルートからは外れているので、家持もそこに行った可能性は



少ない。「後瀬山」は、『万葉集』中2例見られるが、2例とも坂上大嬢が詠んでいる。

後瀬山 のちも逢はむと 思へこそ 死ぬべきものを 今日までも生けれ (④七三九)

これは単に、「ノチセ」という地名から「後で逢おう」と連想し、序詞として使用したものではないだろうか。

田村大嬢も坂上大嬢も、その邸宅からあまり出なかったのではないか。地名表現は、ごく限られた地域のものしか見られない。だからこそ、地名表現も少ないのだろう。

### c 笠女郎の地名表現

笠女郎の歌は『万葉集』中に29首あるが、そのうちに、地名表現が17例見える。

笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌三首

託馬野に 生ふる紫草 衣に染め いまだ着ずして 色に出でにけり (③三九五)

陸奥の 真野の草原 遠けども 面影にして 見ゆといふものを (③三九六)

奥山の 岩本菅を 根深めて 結びし心 忘れかねつも (③三九七)

第一首目の「託馬野」については、「滋賀県坂田郡米原町朝妻筑摩<sup>(24)</sup>」とするのが通説である。二首目の「陸奥の真野」は、「福島県相馬郡鹿島町、真野川流域<sup>(25)</sup>」とされている。いずれも「夷」の地であるが、両者には大きな違いがある。近江が「畿内」に準ずる地域と見られるのに対して、「陸奥」は蝦夷の地である。言うなれば、人の住む所ではない。

「陸奥」は、周知のように「ミチ(道)ノオク(奥)の約<sup>(26)</sup>」である。その「奥」と二首目の「遠けども」が連鎖し、さらに三首目の「奥山」の「奥」、「根深めて」と、言葉の連想が働き、三首ができて上がっている。こうした技法が使われているが、それぞれの地名はおそらく即境性を持つものではあるまい。

笠女郎に歌を贈られていた頃の家持は、内舎人に任官する以前であったとするのが通説である。内舎人時代には行幸に従駕した経験も見られるが、この時期までの家持は、知られる限りにおいて、父旅人と筑紫に下った時以外、地方に下った可能性はほとんどない。

一方、笠女郎の笠氏の本貫は「岡山県西部の笠岡市<sup>(27)</sup>」とされているが、笠女郎は平城京の中で生まれ育ったのであろう。両者ともに、「託馬野」「陸奥」あるいは「伊勢」に足を踏み入れる機会があったとは、どうも考えられない。

また、笠女郎が家持に贈った24首の歌(④五八七～六一〇)の中にも、地名がいくつか見られる。

白鳥の 飛羽山松の 待ちつつそ 我が恋ひ渡る この月ごろを (④五八八)

この「飛羽山」を、大井重二郎は「古飯守峯の西南に続く二一七メートルの小峰<sup>(28)</sup>」としている。東大寺大仏殿の北側、現在の三笠霊園のあたりだという。その「飛羽山」の「松」と「待つ」を掛けているのだが、いわゆる同音反復の序詞である。平城京周辺の地名であるということ以上、こうした地名を詠んだ理由を知ることができない。

伊勢の海の 磯もとどろに 寄する波 恐き人に 恋ひ渡るかも (④六〇〇)  
の「伊勢の海」の場合も、実際に行ったことがない場所だろう。地名表現を含む上三句は、波の恐るべき様子から四句目の「恐き」を起こす序詞の働きをしている。「伊勢の海」はほかに、

伊勢の海の 沖つ白波 花にもが 包みて妹が 家づとにせむ (③三〇六・安貴王)

伊勢の海ゆ 鳴き来る鶴の 音どろも 君が聞こさば 我恋ひめやも (⑪二八〇五)

伊勢の海の 海人の島津が 鮑玉 取りて後もか 恋の繁けむ (⑦一三二二)

のように、3首に詠まれている。笠女郎の「伊勢の海」は、こうした先行歌の影響を受けている可能

性が考えられる。このように、笠女郎の地名表現には、自身の生活環境とは関わりがないと考えられるものが多い。歌の表現としてイメージされたものであり、実態を持たない世界であると考えられる。そこに、笠女郎の地名表現の特徴があろう。

以上、笠女郎の歌に見える地名の多くは、平城京の外のものが多い。多くは「夷」の地のものであったが、今日の我々には実態のわからない地名も詠んでいる。彼女は、「大寺の餓鬼の後に額づくごとし」(④六〇八)のように、突飛な発想で人を驚かすような表現をする歌人として知られているが、地名の選択も意表をつくものと言えるかもしれない。してみると、笠女郎にとっての地名は、単なる空想の世界の映像にすぎなかったのではないか。

笠女郎は、平城京の外に出た経験がほとんどなかったのではないか。しかし、歌を詠むことに対しては強い関心を持っていたと考えられる。また、一族の中には満誓(笠麻呂)のような歌に巧みな者もいる。その生育環境の中に、歌を詠む習慣があったのではないか。笠女郎の地名表現も、そうした歌学びの中で獲得したものであった可能性が高い。

#### d 狭野茅上娘の地名表現

では、狭野茅上娘の歌の場合はどうだろうか。地名表現が見られるものを、挙げてみる。周知の通り、夫の中臣宅守は越前に配流されている。その罪が何であったのかは不明だが、中臣宅守との婚姻が何らかの罪に値したとするのが通説である。とはいえ、正式の結婚であるとの指摘も<sup>(29)</sup>あり、詳しい事情はわからない。

ただ、天平十三年(741)の大赦によって復位されたとされ、天平十一年(739)から天平十二年までに配流されたと見るのが一般的である。茅上娘が二十歳代までに結婚していたとすれば、娘は平城京の時代に生まれたということになる。

あしひきの 山路越えむと する君を 心に持ちて 安けくもなし (15三七二三)  
君が行く 道の長手を 繰り畳ね 焼き滅ぼさむ 天の火もがも (15三七二四)  
人の植うる 田は植ゑまさず 今更に 国別れして 我はいかにせむ (15三七四六)  
我がやどの 松の葉見つつ 我待たむ はや帰りませ 恋ひ死なぬとに (15三七四七)  
他国は 住み悪しとそいふ 速けく はや帰りませ 恋ひ死なぬとに (15三七四八)  
他国に 君をいませ 何時までか 我が恋ひ居らむ 時の知らなく (15三七四九)  
天地の 底ひの裏に 我がごとく 君に恋ふらむ 人はさねあらじ (15三七五〇)

この歌群については、目録に詳しい記述がある。

中臣朝臣宅守、蔵部の女孀狭野弟上娘を娶りし時、勅して流罪に断じ越前国に配す。ここに夫婦別れ易く会ひ難きことを相嘆きて、各働む情を陳べ、贈答せる歌六十三首。

これによって、歌に見える「山路」「道」とは、越前国に至る道を指しており、「国」と「他国」は、越前国を指していることがわかる。つまり娘は、平城京に居ながら越前国を見続けていたのだ。いや、越前に目が向かざるを得なかった時期にその歌々が生まれた、と言った方がいいだろう。

目録に見える「蔵部の女孀」とは、「東宮職員令」によれば実際の出納を行う部署の下級女官のことである。つまり、日々平城宮内で過ごしていた女性に<sup>(30)</sup>突然訪れた夫の配流が契機となって詠まれた歌々である。「他国」など、他の用例のない地名表現も見られるが、それは、偶発的な事態が、そうした地名を詠む契機になったという点で、やはり特殊な事例であると言えるだろう。逆に言えば、それらは配流という事態に遭遇しなければ絶対に詠まれなかった地名表現だと言える。

## 五 結

元正・孝謙の両女帝と光明皇后は、その生活基盤が宮中にあり、行幸以外はあまり外に出ることがなかったと考えられる。とはいえ、平城宮を世界の中心として捉えた地名表現が見られ、そこから平城京の外へと眼が向いている。

田村大嬢と坂上大嬢は、平城宮の東側に位置する「佐保」を中心とした高級官僚たちの住む地域に生活する貴族のお嬢さんたちだが、彼女たちの行動範囲も、非常に狭いものであったと考えられる。大伴家の諸宅のある平城京の外京を中心とした、ごく狭いエリアに限定して考えることができよう。彼女たちの歌に見られる地名表現は、それをまさに証明している。

また笠女郎も、平城京に生まれ育った都会の女性であろうが、大嬢たちに比べれば、少し格式の下がる氏族の出身である。大伴旅人は大宰府で満誓、すなわち笠麻呂と共に歌を詠んでいる（③三三六・三五一）が、笠女郎と家持との関係は、大伴氏と笠氏が同じく武門の家柄として、古くから交流があったことに基づく可能性も指摘されている。家持との交流はあっても、平城京の外に出ることはあまりなかったのだろう。そのためか、彼女の地名表現は、空想の世界を描くものばかりである。

そして狭野茅上娘子は、笠女郎と比べても、やや低い身分だったと見られるが、目録の記載の通り「蔵部の女孀」だったとすれば、平城宮を日常生活の場としていた女官であったということになる。そんな女官が、突然夫の配流に直面し、結果として生まれた歌々に見られる地名表現は、他の女性歌人のそれと比べると、非常に特殊なものと言える。

このように、この時代の女性歌人の地名表現は、彼女たちの行動範囲や生活環境を写す鏡のような役割を担っている。階層や身分が違うことによる差異が存在するのだ。同じく平城京で生活をしていながら、異なる眼差しが見られるのは、そのためである。

一方、個人の価値観とは別に、共通認識と言うべきものも見られる。当然のことだが、それは自分たちの住む平城京を世界の中心として、そこから「夷」への関心も広がっているという点である。

加えて、天平期の女性歌の担い手は、大伴坂上大嬢たちのような貴族のお嬢さんたちではないかと思われる。女帝や皇后、狭野茅上娘子は、むしろ例外的であると言うべきではないか。もともと女性が歌を詠むということ自体が特殊なことで、下級階層の人々はなかなか詠む機会がなかったのだろう。行動範囲の限られた大嬢たちの歌こそ、この時代の女性歌の典型だったと考えられる。

しかし、それを言うには大伴坂上郎女、坂上大嬢などの女性歌人たちの作品もつぶさに検討しなければならない。それは今後の課題として、ひとまず擱筆することにした。

- (1) 「地名表現」という言葉に関しては、拙論「大伴坂上郎女作品の地名表現—地名をうたう意識—」（『桜文論叢』66巻・2006年）において詳しく述べた。
- (2) 小島憲之ほか校注・訳者『萬葉集〈新編日本古典文学全集〉』全4巻・小学館・1994～1996年
- (3) 稲岡耕二『萬葉集全注 卷二』（有斐閣・1985年）
- (4) 小沢毅「古代都市『藤原京』の成立」（『考古学研究』44巻3号・1997年）
- (5) (3)と同じ。
- (6) 伊藤博『萬葉集全注 卷十八』（有斐閣・1983年）
- (7) 他に、誉謝女王の作る歌（①五九）も、舎人娘子と同じ三河行幸時の作品であるが、これには地名表現が見られない。
- (8) (2)と同じ。
- (9) 中西進・辰巳正明・日吉盛幸『萬葉集歌人集成』（講談社・1990年）に載せられていた女性歌人を数えた。

- (10) 藤原京の時代同様、小島憲之ほか校注・訳者『萬葉集〈新編日本古典文学全集〉』小学館・1994～1996年の「人名一覧」、他の解説書でも作歌年代の不明なものがあつた。「娘子」(16三八〇三番)「車持」(16三八一一)「児部女王」(16三八二一)「沙弥女王」(9一七六三)「駿河采女」(4五〇七・8一四二〇)「園臣生羽之女」(2一二四)である。これらについては省略することにした。
- (11) 例えば、大伴旅人歌に見られる地名表現は57例。
- (12) (1)の拙論。
- (13) 小野寺静子「大伴家の人々」(『坂上郎女と家持—大伴家の人々—』翰林書房・2002年)では、持統十年(696)としている。
- (14) 中西進「夷」(『万葉史の研究』桜楓社・1968年)は、『万葉集』中の訓字の「ヒナ」はすべて「夷」と表記していることを指摘した上で、「夷」とは外来文化によって生じた、貴族的で絢爛たる京の文化の対極にある世界だとしている。
- (15) 梶川信行「阿騎野と宇智野—『万葉集』のコスモロジー—」(本誌所収)
- (16) 井手至『萬葉集全注 卷八』(有斐閣・1993年)
- (17) (2)と同じ。
- (18) 佐藤美智子「万葉集中の国守たち—一家持の内舎人から越中守時代について—」(『萬葉』112号・1983年)
- (19) 川口常孝「大伴家持—『佐保の宅』考」(『万葉の歌人たち』武蔵野書院・1974年)は、「大伴家の所在地は佐保路(一条南大路)に面した、公立学校共済組合の福祉施設である奈良宿泊所—春日野荘のあるあたりだろう」としている。
- (20) (2)は、「法華寺の真南約一・二キロメートルの地点」としている。
- (21) 川口常孝「大伴諸宅」(『大伴家持』桜楓社・1976年)は、奈良市百万ヶ辻子町にある開化天皇陵が「春日率川坂上陵」と呼ばれていることから、その辺にあつたとしている。
- (22) 伊藤博『萬葉集釋注 四』(集英社・1996年)
- (23) (2)と同じ。
- (24) 伊藤博『萬葉集釋注 二』(集英社・1996年)。ただし西宮一民『萬葉集全注 卷三』(有斐閣・1984年)は、「大宰府より貢した紫草の産地として、肥後の託摩郡が知られていた」としている。
- (25) (24)の伊藤博のと同じ。
- (26) 大野晋ほか編『岩波古語辞典 補訂版』(岩波書店・1990年)
- (27) 梶川信行「笠氏の家系」(『万葉史の論 笠金村』桜楓社・1987年)
- (28) 大井重二郎「大伴寺の所在と佐保の奥津城附・飛羽山」(『園田国文』3号・1982年)
- (29) 上田敦子「中臣宅守小論—その配流の原因を中心として—」(『国文目白』1号・1962年)
- (30) 吉井巖『萬葉集全注 卷十五』(有斐閣・1988年)のように、狭野茅上娘子を架空の女性だとする向きもあるが、通説通り、実在の女性とする。